

① この記事に出てくる駅員さんは、なぜ介助を断ったのでしょうか。理由を推測してみましょう。

② 小島弥生さんが感じている悩みを、記事中から抜き出しましょう。

③ 「バギー型」車いすのシンボルマークを記事や写真から探してみましょう。

④ 「知らなかったため」に思いがけず相手に嫌な思いをさせたり、困らせたことはありませんか？ 自分の体験から探してみましょう。

シンボルマークを付けたバギー型の車いすです外出する本田香織さんと娘の萌々花ちゃん＝6月、大阪市



### 病気や障害のある子どもが利用



バギー型の車いす外出する小島弥生さんとあかりちゃん＝6月、東京都足立区

# 「バギー型」車いす知って

病気や障害のある子どもが利用する「バギー型」と呼ばれる車いすを知ってもらおうと、母親らが啓発に乗り出している。外見が似ているためベビーカーと間違われ、介助が受けられなかったり、心ない言葉を掛けられたりするからだ。作製したポスターは各地で掲げられるなど、活動が広がりをみせている。

「ベビーカーに入ろうとは出せません」。2年ほど前、大阪市の本田香織さん(36)が長女・萌々花ちゃん(6)と電車に乗ろうとしたときのことだ。必要な介助を駅員に申し出たが断られ、ショックを受けた。使っているのは、バギー型の車いすだ。見た目はベビーカーにそっくりだが、障害に応じて体を固定できるのが特徴。萌々花ちゃんは今後6カ月で脳神経の病気が

## 母親らが啓発活動

「折り畳むように言われた」「なぜ歩かせないのか」と叱られた。運営するブログで同じ経験を持つ人が多いことを知った本田さんは2015年9月、一般社団法人「mina family」を立ち上げた。啓発のシンボルマークやポスターの作製、勉強会に力を入れる。

活動の輪は母親らを通じて広がり、シンボルマークのキーホルダーは全国から増えた。

と診断され、自分で立つことができず外出には欠かせない。東京都足立区の小島弥生さん(39)も同じ悩みを抱え、大阪市営地下鉄は、独自に「ごども車いす」を製作、全線に張ってくれた。本日は、啓発ポスターの電車内では「大きな子を乗せよう」との活動を広げていくつもりだ。「多くの人に字のつづきを感じ、子ども用の車いすの存在を知ってもらおうと、病気や障害そのものへの理解も広まってほしい」と話した。

### バギー型車いす



体に病気や障害がある小学生低学年くらいまでの子どもが利用する車いす。重さが数十kgになるものもあり、背もたれなどに首や体をしっかりと固定できるのが特徴。介助型とも呼ばれる。販売会社によると、利便性を考えた製品の開発が進み、10年前からベビーカーに似たデザインが増えた。